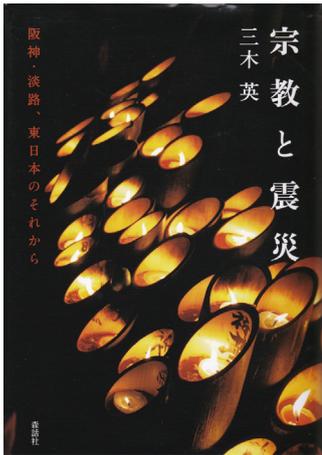


大阪国際大学教授の三木英による宗教社会学研究は、近年、「震災後の宗教」と「ニューカマーの宗教」という二つの極をめぐって展開している。本稿では、近年次々と刊行された三木氏の著作から、単著1冊と編著書2冊を紹介したい。これらはこの2つの軸でそれぞれ展開し、そして両者が発展融合して「復興・宗教・ニューカマー」に関する研究へと至っているのである。

『宗教と震災—阪神・淡路、東日本のそれから—』（森話社、2015年）



『宗教と震災』

本書は「震災後の宗教」研究についての単著である。三木氏は、時間の経過とともに「元・被災地」となった被災地での宗教性の変容の姿に着目した。緊急支援においては、天理教災害救援ひのきしん隊など宗教の活動も目立つが、この時点では宗教的支援といっても、傾聴など心の支援もあるものの、一般のボランティア活動とあまり相違することはない。この段階が終われば、支援のあり方も復興支援へと変化していき、やがて被災地の生活が日常に戻るにつれて、日常支援となっていく。さらに時間の経過とともに、いかなる大災害も歴史的出来事へと変容する。しかし、災害の爪痕は人々の記憶に残り、そこに慰霊祭や追悼行事が行われ続ける意味も存するのである。

本書は3部構成で、終章を含め全9章からなる。第1部「大震災と教団」では、阪神・淡路大震災および東日本大震災における宗教団体の動きを概観する。第2部「被災者による被災者の救い」では、記憶を共有する被災者が祭りや巡礼の行事を通じてお互いに心魂の救いを得ていく様子を取り上げる。第3部「震災記憶の風化のなかで」では、被災地の宗教の活動や意味の変容を行っている。第2部・第3部は、主に神戸での参与観察の報告が行われており興味深い。終章「不慮の災害と宗教の可能性」は、上記の研究から見えてきた被災地における宗教の課題について総括する。

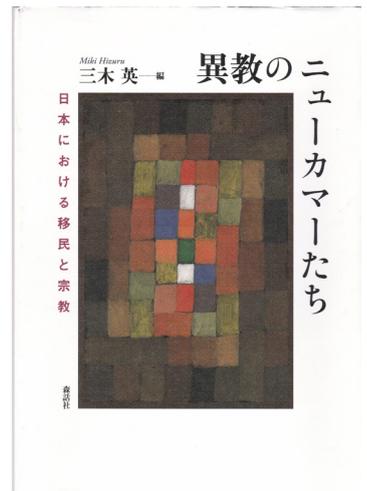
本書は3部構成で、終章を含め全9章からなる。第1部「大震災と教団」では、阪神・淡路大震災および東日本大震災における宗教団体の動きを概観する。第2部「被災者による被災者の救い」では、記憶を共有する被災者が祭りや巡礼の行事を通じてお互いに心魂の救いを得ていく様子を取り上げる。第3部「震災記憶の風化のなかで」では、被災地の宗教の活動や意味の変容を行っている。第2部・第3部は、主に神戸での参与観察の報告が行われており興味深い。終章「不慮の災害と宗教の可能性」は、上記の研究から見えてきた被災地における宗教の課題について総括する。

『異教のニューカマーたち—日本における移民と宗教—』（森話社、2017年）

本書は「ニューカマーの宗教」研究についての共編著である。在日華僑や在日コリアンのような旧来の外国人（オールドカマー）に対して、近年さまざまな国や地域から来た外国人が日本で定住生活を始めている。ニューカマーと呼ばれるこの新しい隣人たちは、それぞれ自国での宗教を日本に持ち込んでみている。三木氏は宗教的ニューカマーの研究として科研費を取得し、その共同研究の成果としてこの編著が刊行された。

本書は3部構成全14章及び附録からなり、科研メンバーが手分けして調査を行い、そうした宗教の状況を述べている。第

1部は「イスラームとハラールの広がり」（三木英、藤田智博、沼尻正之）。第2部は「台湾・ベトナム・スリランカから来た宗教」（三木英、岡尾将秀）。第3部は「韓国・ラテン・フィリピン・旧ソ連発のキリスト教」（中西尋子、三木英、藤田智博）。どの章も教えられることが多いが、とくに第3部でニューカマーの韓国系キリスト教を取り上げ、韓国人宣教師と日本人信者の双方にインタビュー調査を行っている第10章・第11章（どちらも担当は中西尋子）は、日韓関係の歴史的背景なども踏まえて考えると、とても興味深いものがある。



『異教のニューカマーたち』

『被災記憶と心の復興の宗教社会学—日本と世界の事例に見る—』（明石書店、2020年）

本書は、「震災後の宗教」（『宗教と震災』）と「ニューカマーの宗教」（『異教のニューカマーたち』）との研究成果を総合させ、さらに一步研究を深めた編著作である。本書は、「傷ついた心の復興及び惨事の記憶の継承」に関する科研共同研究の成果として著された。

第1章と第2章では、国内及び国外の「旧被災地における惨事の記憶」として、濃尾地震から伊勢湾台風に至る自然災害と信楽高原鉄道列車事故、インド洋津波（インドネシア、タイ）とカンタベリー地震の被災地（ニュージーランド）の被災地の取材報告を行い、これを踏まえて第3章で「惨事の記憶継承における宗教の役割」を論じる（以上、三木英）。第4章は、四川大地震や青海大地震における宗教の救援活動と震災の記憶継承について扱う（川田進）。種々の取材制約を乗り越えてなされた現代中国における宗教の震災支援の報告は、とても貴重なものだ。第5章は、東日本大震災被災地で行われているアートによる追悼の営みを取り上げている（渡邊太）。人々の宗教心はアートという形で表現され、それは「拡散宗教性」と位置付けられる。第6章は在日スリランカ人の上座仏教による国際的な被災者支援の状況について論述する（岡尾将秀）。

現在、新型コロナウイルスが世界中で猛威を振るっている。しかしこの疫災もいつかは終結する。そのとき、日本の宗教、世界の宗教はどのように犠牲者の慰霊を行い、追悼儀礼をしていくのだろうか。



『被災記憶と心の復興の宗教社会学』